

レスキス作品 『THE HEAVEN BEFORE THE EYES』研究

—マックス・エルンストのコラージュ論をめぐって—

お茶の水女子大学大学院生 關 典子

〈目的と方法〉

振付家ジョエル・ブーヴィエ (Joël Bouvier, 1959~), レジス・オバディア (Régis Obadia, 1958~) 率いる「レスキス (L'ESQUISSE)」は、フランス語で「スケッチ」を意味し、このことが端的に示すように、彼らは絵画から多くの影響を受け、その舞台もまた、しばしば「絵画的」と評されている。なかでも、『THE HEAVEN BEFORE THE EYES』(1991) は、「超現実的な絵空事のあらい難い美しさ」とも評されるシュルレアリスムの要素の強い作品である。本研究では、レスキス作品にみられるシュルレアリスムのイメージについて、画家マックス・エルンストのコラージュ論を手がかりとする図像的分析および解釈を行い、その具体的側面を明らかにする。

〈結果と考察〉

コラージュとは、書物の挿絵など、既成の紙片を切り貼りして画面を構成する技法である。エルンストは、これを「視覚的イメージの錬金術のような何ものかである。様々な存在および物体を、それらの物理的ないし解剖学的な外観を修正しあるいは修正しないで、全面的に変形させてしまうという奇蹟である。」¹と定義している。振付家ブーヴィエ、オバディアもまた、「イメージを変形させたり壊したりすることは、私たちにとっても非常に興味のあること。日常生活の様々な断片のイメージ、そして何よりも絵画が、私たちの創作に強いインスピレーションを与えてくれる。」²と述べており、両者には、既知の事物を組み換えることで、その全体的なイメージの「変形」を図るという共通の理念(デペイズマン)が見出される。

そのための有効な手段として用いられるのが、座標の転換である。たとえば、『百頭女』(1929) といったコラージュ作品においては、本来、水平に横たわった女性の身体が垂直に立てて置かれることで、捉えどころのない浮遊感が際立ち、現実の世界とは奇妙にずれた超現実的な雰囲気醸し出されている。エルンスト研究者ヴェルナー・シュピースも指摘するとおり、「彼の興味を引いた要素は大概、人目につかないものであって、それ自体、詩的でもなければ、超現実的でもない。エルンストは、よく変哲もない微細な要素を取り出しているが、それらは新しい座標軸に収められ、その本来の場所から切り離されて、新しい役目を引き受ける」³。レスキス作品『THE HEAVEN BEFORE THE EYES』では、舞台も衣裳も徹底してモノクロームに統一され、白い背景に黒い衣裳

の男女が浮き立ち、黒いスーツの男性にリフトされる女性の白い肌が浮き立つといったコラージュにも似た視覚効果をもたらし、振付の合間に挿入される緊張感あふれる長い静止は、まさしく一幅の絵画のようなイメージを与える。そこにおいて一貫して呈示されるのは、全身を伸ばし爪先を揃え、片膝を軽く屈めた姿勢の女性のフォルムである。冒頭のシーンで提示される水平に横たわる身体、垂直に立つ身体は、我々にとって既知のイメージである。しかし、その基本のフォルムが、シーンを追うごとに座標を転換し(垂直、水平、傾斜)、さらに様々な支持体(バトン、背景幕、男性)に貼り付けられ、浮遊するとき、既知のはずのイメージは、未知なるものへとずらされてゆく。こうして舞台は、エルンストのコラージュが立体化したような超現実的空間へと変貌を遂げてゆく。さらに作品の終盤、女性の横たわるテーブルがそのまま垂直に立てられ、水平と垂直の座標が急転するとき、「貼り付け」は瞬時に「磔」のイメージへと変貌する。作品全体を通して「水平」「垂直」の座標の転換を目の当たりにしてきた観客にとっては、そこに「十字」のイメージを透視することすら可能となるだろう。それは、作品中に現われた様々なイメージが収斂する瞬間であり、何の変哲もないものが組み合わさることで、思いがけないイメージを生じさせるという意味において、エルンストのいう「視覚的イメージの錬金術」としてのコラージュを実感させる瞬間でもある。

〈結論〉

レスキス作品には、見慣れた既知のイメージの座標を転換させ、現実とは異なる構図の中に配置することで、未知なる超現実的イメージを生み出すという、エルンストのコラージュにも通じるデペイズマンの概念が貫かれている。執拗なまでに繰り返される「はりつけ」のイメージには、過剰なまでに現実を問い直すことで超現実を目指すという、ある種のシュルレアリスム的美学を見出すことができ、また、作品の最後に現われる「磔」の形象とは、「今、ここ」という現実に敢然と踏みとどまりつつ、身をもって現実を問い直すという、コンテンポラリーダンスの一つの姿勢を象徴するものとして解釈することも可能である。尚、レスキスはこの他の作品においても「はりつけ」のイメージを多用しており、本研究によって、その独自性的一端が明らかとなった。

- 1 Ernst, Max. 'La mise sous whisky marin,' "L'au - delà de la peinture," *Écritures*, Gallimard, 1970, p.253.
- 2 ブーヴィエ, オバディア「レスキスが語るレスキス」『城壁の向こうで』, Bunkamura, 1989.
- 3 シュピース, ヴェルナー『マックス・エルンスト—美しき女庭師の帰還—』田部淑子訳, 河出書房新社, 1977, 30頁.